

それでは、マタイの福音書 6 章、『主の祈り』の後です。14 節から見て参ります。マタイの福音書 6 章 14 節、15 節をまず初めに通してお読みします。『¹⁴もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。 ¹⁵しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。』互いに赦し合うという必要、これは『主の祈り』の中でも祈られていましたし、『主の祈り』の中の強調点でありました。そして、勿論今私たちが見ているのは『山上の説教』の一部であります。これは説教の中の一節ですから、説教全体も捉えていく時に、互いに赦し合うということがイエスによって繰り返し強調されているということにもお気づきになろうかと思えます。直前の『主の祈り』の中だけでなく、その前の 5 章 21～26 節のところでも赦し合うということがイエスによって説かれております。『²¹昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。 ²²しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし』と言うような者は、最高議会上に引き渡されます。また、『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(地獄に落とされるということです。) ²³だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、 ²⁴供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。 ²⁵あなたを告訴する者とは、あなたが彼と一っしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることとなります。 ²⁶まことに、あなたに告げます。あなたは最後の一コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません。』これもやはり互いの間にある未解決の問題が大きな障害となって、そして後々に、またその問題がさらに大きく膨らむということイエスは警告して、その前に対処しなさい。その前に解決しなさい。その前に人間関係を健全化するようにと。苦々しい思い、お互いの中に何か問題があったならば、それが必ずあなたを蝕み、あなたを苦々しい人間にさせてしまいます。被害者妄想に陥ってしまう。屈折した人間にあなたを閉じ込めてしまうんです。そこから脱するためには、唯一赦しだけが解決法となるということです。この赦しをもって和解をするということです。互いに赦し合うということ。これがイエスの説教の中でもハイライトとなっております。この『山上の説教』の講解説教の決定版、D.M.ロイドジョーンズの『山上の説教』という同じタイトルの本がありまして、その中で非常に重要な考察がなされていますので、そこを皆さんに少し長いですがけれども、抜粋してお分かちしたいと思います。

『あなたや私が赦されている証拠は、他の人々を赦すということにある。自分の諸々の罪は神によって赦されていると考えていても、他の誰かを赦そうとしていないとしたら、私たちは思い違いをしているのである。決して赦されてはいないのである。自分がキリストの流された血によってのみ、またその血を通してのみ赦されていることを知っている人は、他の人々を赦さずにはいられない人である。その人はそうしないではいられない。キリストを本当に自分の救い主として知るなら、私たちの心は砕かれて、頑ななままではいられなくなる。そして赦しを拒否できなくなる。もし、あなたが誰かに対して赦しを拒否しているとしたら、あなたは決して赦されたことがないのではないかと思う。私は神の御前にある自分を見てとり、私のほむべき主が私のために何をしてくださったかを如何ほどかでも悟る時には、常に如何なる人をも何についてであれ喜んで赦すことが出来る。それを抑えることは出来ない。抑えたいとさえ思わない。神に向かって祈って言うが良い。「おお神よ。私をお赦し下さい。私もあなたが私のために行なって下さったことのゆえに、他の者たちを赦しました。私が求めているのは、ただ同じような仕方であなただけを赦

して下さる事です。同じ程度にはありません。私の行なうことは皆不完全ですから。私は言わばあなたが私を赦して下さったのと同じ流儀で他の人々を赦しているのです。私をお赦し下さい。私も主イエス・キリストの十字架が私の心の中で行なったことのゆえに、彼らを赦しました。」この祈願には贖罪が満ちている。神の恵みが満ちている。このことが如何に重要であるかは、私たちの主が現実にそれを繰り返しておられる事実からも明らかである。『もし人を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを許して下さい。しかし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。』マタイ 6:14, 15。(先程お読みしたところです。) このことは絶対的で避けられない。真の赦しは人を砕く、その人は赦さざるを得なくなる。だから赦しを求めるこの祈りをささげる時、私たちはそのことによって自分を検証しているのである。私たちの心の中に赦しが見出されない限り、決して私たちの祈りは純粹なもの・真実なもの・少しでも有用なものではありえない。願わくは神が私たちに自分に正直になる恵みを与えて下さるように。』

少し長かったですけれども、ここでロイドジョーンズが使っている言い回しにもう一度着目したいと思えます。もしあなたが本当に救われているならば、本当に神の赦しを受け取ったことのあるクリスチャンならば、他の人々を赦さずにはいられない。クリスチャンとは、他の人々を赦さずにはいられない、そういう人たちです。その気持を、その決意を抑えることは出来ないと言っています。ロイドジョーンズは、抑えたいとさえ思わないと。これが本物のクリスチャンです。そうするとあなたはどうでしょうか。私は偽物のクリスチャンですと。なぜなら、赦したくないと思っているからです。「絶対にあいつだけは。」とか。「絶対にあの人だけは。あの時のあの発言、あの行為。あれだけは。」根に持っている人もあるかもしれません。それもあなたの選択の自由でありますけれども、でももしあなたが赦さないことを選ばなければ、あなたも神の赦しを経験できない。若しくはあなたは未だかつて神の赦しをまともに経験したことがない者だということを自己証明したに過ぎません。事実あなたは赦されていない人間として、あなたの中にも罪悪感があるでしょう。そしてあなたは開放されていません。怒り、憎しみ、恨み、苦々しい思いにいつも閉じ込められているはずであります。被害者妄想にいつでも駆られているはずであります。屈折した人間となってしまっていると思えます。ですから、イエスはそんなあなたを開放したいと願っているんです。人を赦すということは、あなた自身を解放することでもあります。そして、神の赦しという恵みをさらにエンジョイ出来るという素晴らしい祝福が伴うわけです。

エペソ 4:32。『お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦して下さったように、互いに赦し合いなさい。』

また、コロサイ 3:13。『互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦して下さったように、あなたがたもそうしなさい。』

誰かが他の人に不満を抱くことがあってもです。「そんなのフェアじゃない。何故私が謝らなければいけないのか。何故私が赦しを乞わなければいけないのか。何故私が赦しを宣言しなければいけないのか。悪いのはあっちだ。私は悪くない。被害を被ったのはこっちであると。それでは泣き寝入りじゃないですか。」誰かが他の人に不満を抱くことがあっても、自分自身がそう思ったとしても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦して下さったように。これがキーワードです。あなたは赦された者です。いつもこのことを忘れないで下さい。人を赦すということを考える前に、クリスチャンだから人を赦さなければいけないと考えてしまう前に。その前にあなたは赦された者だということを、ここから始めて頂きたいと思えます。そのことに思いを潜める時に、ロイドジョーンズが言う通り、他の人々を赦さずにはいられなくなると思えます。その赦しがどんなに大きなものだったのか。その赦しを受けるためには、神がどれだけの犠牲を払って下さったのか。それを思うだけで、もはや人から受けた傷や損害、それらはハッキリ言うてもうどうでもよくなると思えます。それよりもあなたが罪のないひとり子イエス・キリストに与えた傷、与

えたはずかし辱め。あなたはイエスの顔につばを吐いたんです。さら晒し者にしたんです。真っ裸にして背中を鞭打ったんです。内臓が飛び出るほどの。釘で両腕両足を十字架に打ち付けたんです。茨の冠もかぶせました。あなた自身の手で。あなたがやったんです。私がやったんです。私たちがイエスをそんなふうにしてしまったんです。赦されない、絶対に。そんなことをした私たちは地獄行きです。それが相当なわけです。罪のない方にどれだけひどいことをして、無条件で赦されたのに、私たちは自らも罪人であるにもかかわらず、よくよく考えれば相手ばかりでなくて、自分の方にも落ち度があったに違いないと冷静に考えれば、一方的に悪いわけじゃなくて私にも落ち度があった。私にも誤解を招くような、そういう態度がなかったか。自分も弱かった。売り言葉に買い言葉だったとか。イエスにはそういう落ち度はなかったんです。イエスだけが理不尽な扱いを受けたわけです。私たちは罪人ですから、理不尽とは絶対に言えないんです。完璧な人間だけが理不尽だという単語を使えると思います。

ですから、是非主があなたがたを赦して下さったように。その赦しがどういうものだったのか。もう一度考えて下さい。ただの赦しではないということです。人が人を赦すとは全く違う、次元の異なる赦しだということです。その赦しをあなたはもう既に体験しているんです。残念ながら彼らはまだ体験していないわけです。かわいそうです。加害者なのにかわいそうだと思えるわけです。是非、イエスの言葉を厳粛に受け取って頂きたいと思います。この『山上の説教』で繰り返し繰り返しイエスが強調されていたこと、それは『赦し』でありました。この『赦し』はこの世には存在しないものです。これは神の御業です。神の恵みです。イエス・キリストが十字架に掛かって死んでくださらなければ、人類には知られなかった次元の『赦し』であります。これを今私たちは頂いているわけです。

マックス・ルケードというアメリカの著名な牧師でもあり、作家でもあるその人がこう言っています。「クリスチャンをクリスチャンたらしめているのは、完全さではなく、赦しなのだ。」と。「クリスチャンは聖人君子です。」とある人たちはイメージとして持っているかもしれませんが、とんでもありません。むしろ、「クリスチャンをクリスチャンたらしめているのは、完全さではなく、赦しなのだ。」と。

これは前回、『主の祈り』の時にも引用した言葉で C.S.ルイスがこう言っています。「クリスチャンであるとは、赦し難い人を赦すことである。神があなたがたの中にある赦し難いものを赦して下さったからである。」と。

もう一つ、これもマーティン・ロイドジョーンズの引用で、これもその時に併せて引用しました。思い出して下さい。「キリスト者とは自分で自分を赦すことが出来ないにもかかわらず、神は自分を赦して下さったということを悟っている人のことである。言い換えれば、自分が赦されている事実には驚いている人のことである。」

そして、これは新しく紹介する引用です。ホロコーストの生存者でコーリー・テンブーンという言葉です。「赦しは怒りの扉を開き、憎しみの手錠を外す鍵である。それは悲痛の鎖を断ち、利己心という足かせを断つものである。イエスの赦しは私たちの罪を取り除くばかりでなく、あたかも罪などなかったかのようにしてくださるのである。」そして、彼女はこうも言っています。「他人を赦すことが出来ない者は、自分が渡らなければならぬブリッジを壊すことになります。」神が赦して下さったように、私たちが他者を赦さないならば、自分が渡らなければならぬブリッジを自ら破壊することになると言っています。

そして三浦綾子さんはこう言っています。「人間、怒ることはやさしい。だが相手の謝罪を受け入れるということはそう簡単には出来ないことだ。その証拠に私たちは、人を怒って苦しむよりも、人を赦せなくて苦しむことの方が多いのではないかと思う。」その通りですね。

クリスチャンでも時に赦せないという思いに駆られることがあると思います。ムカついて、腹が立って、「何故あの人はあんなことを言うのか。」とか、特にクリスチャンに対しては「クリスチャンのくせに。」とか、「クリスチャンなのに。」とか、より腹が立つと思います。自分と関係が近ければ近いほど、身内だ

からこそ怒りが倍増というところもあると思います。でも、そういう時に『主の祈り』は非常に効果的だということをもう一度覚えて下さい。『主の祈り』の中で赦しの項目で、『私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。』我らの罪を赦し給え。我らに罪を犯す者を我らが赦す如く。これは、不思議なことですけれども、祈りによって自分の中の苦々しさ、赦せないという凝り固まった思い、それが不思議と解き放たれる。是非このことを試してみてください。私と有基子は毎日毎晩『主の祈り』を夫婦で一緒に心合わせて祈っています。時に機械的になりがちですけれども、でもこの祈りによって心の中に変化が起きることも体験しています。『私たちの負いめをお赦しください。』心を込めて祈って下さい。『私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。』という宣言です。で、この宣言をした途端に、これは信仰をもって勿論祈るわけですけれども、急に苦々しい状態から解放されて、何か重いものが軽くなるような感覚が必ずやって来ます。信じて祈るならば、ビターな人からあなたはスイートな人になります。是非やってみて下さい。単純なことなんですけれども。どうやったら人を赦せるか。どうやったら赦せないという牢獄から解放されるのか。『主の祈り』は実に効果的です。「赦さなければいけないことは分かっているけれども、頭では分かっているけれども、感情が追いつかないんです。」とか。「どうやったらいいのかわかりません。その人のところに行って宣言することなんでしょうか。」いろいろ頭で思い巡らすわけですけれども。その中で一つ『主の祈り』を心を込めて信仰によって神の前に明確に宣言するように祈る時、あなたの心の中に何かの変化が必ず起きます。祈りは必ずしも状況を変えるわけではありませんが、祈りは確実にあなたを変えます。『敵を愛しなさい。迫害する者のために祈りなさい。』と。祈り始めてみて下さい。そうすると今まで敵だと思っていた人、あなたが憎んで嫌っていたその人が何となく身近な存在に感じるようになります。祈りは敵を隣人に変えてしまうんです。イエスの命令通りにやってみたら、必ず不思議なことが起こるんです。そのことを皆さんにもお勧めしたいと思います。『主の祈り』によって、ビターな人からスイートな人になります。

で、次に 6 章 16 節から 18 節を通してお読みします。『¹⁶ 断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。¹⁷ しかし、あなたが断食するときには、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。¹⁸ それは、断食していることが、人には見られないで、隠れた所におられるあなたの父に見られるためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が報いてくださいます。』ずっと私たちは 6 章から施しについて、これもやはり人に見せるために人前で、善行する時は注意しなさいと。施しをする時は、人にほめられたくて道端で喧伝するように、宣伝するようにやってはいけなさと。で、その後続く祈りの教えもやはり人前のパフォーマンスではなくて、隠れたところにおられる父を意識して、真心から祈りなさい。言葉数が多ければ聞かれると思ってはいけなさと。一つ一つの言葉に自分の思いを込めて、真実な気持ちで。『主の祈り』もそうです。ただ単に礼拝のプログラムにあるから、それを読み上げるという機械的な祈り方ではなくてです。で、同じように断食もやはり偽善的であってはいけなさい。人の前で人に見られるように、人にほめられるように、自らに栄光を帰すようなパフォーマンスであってはいけなさい。善行にしても、施しにしても、祈りにしても、これは同じであると。断食も同じであると。ちなみに断食というのは、ユダヤ人であるならば、律法で年に一回必ず実行するようにと、命令されております。その年に一回というのが『贖罪の日』と呼ばれる日です。これは全国的に、全国民を挙げて、一斉に行なう断食であります。ところがパリサイ人たちは、彼らは偽善者と呼ばれてるんですが、週二回、月曜日と木曜日に断食を敢行しておりました。自分たちが断食しているのが、誰の目にもひと目で分かるようにわざわざ髪の毛をボサボサにして、無精髭を生やして、そしてやつれた顔をして、人の前にフラフラと現れるわけです。「どうしたんです。」「断食してるんです。」「素晴らしいですね。今日は贖罪の日ではありませんが。」「そうです。私は週に二回も断食しているんで

す。」と。如何に自分たちが、敬虔な信者であるのか、靈的であるのかということのアピールするようにして、彼らはわざと外面的に身をやつして、如何にも神のために苦しい思いをしているんだというような格好で出てくるわけです。そんな偽善的な断食をイエスは断罪しているわけです。断食している時は、それと分かるようにしてはならない。誰にも分からないように、却ってシャワーを浴びて身綺麗にして、そして元気ハツラツで行きなさいと。そうでないと、折角の断食においても報いは受けられませんと言われてます。で、この断食については、現代の教会ではあまり注目されませんし、あまり歓迎もされてないかもしれません。正しく認識もされていないでしょうし、実際にほとんど断食なんかしたことがない。これを習慣として行なったこともないという人の方が多分多いと思いますので、簡単にではありますけれども、断食の意味だとか目的、今ここを掘り下げて時間を取りたいとは思っておりませんが、概観だけでも皆様に少しだけお伝えしたいと思います。断食の目的、それは何なのか。「勿論、それは減量ダイエットです。」そんなことはないですね。健康のためとか、確かに臓器を休めるといのは健康に良いかもしれませんが。自分の願いを通すため、ハンガー・ストライキ、これも間違いです。でも、そんな間違っただけで断食をしている人たちもあるわけです。自分の夢を叶えてもらうために、願いを叶えてもらうために、神に対してハンガー・ストライキして、断食して、断食さえすれば、私の願いは聞いてもらえる。まるで苦行してお百度参りしてでも神仏に願うように。それが断食の目的ではありません。

レビ 16 : 29~31 を読みたいと思います。これが一年に一回イスラエルが国家をあげて国民的断食をする日であります。贖罪の日、“ヨーム・キップール”とヘブル語で言います。『²⁹以下のことはあなたがたに、永遠のおきてとなる。第七の月の十日には、あなたがたは身を戒めなければならない。この国に生まれた者も、あなたがたの中の在留異国人も、どんな仕事もしてはならない。³⁰なぜなら、この日に、あなたがたをきよめるために、あなたがたの贖いがなされるからである。あなたがたは、主の前でそのすべての罪からきよめられるのである。³¹これがあなたがたの全き休みの安息であり、あなたがたは身を戒める。これは永遠のおきてである。』“身を戒める”という言葉が繰り返し出てきております。この“身を戒める”という言葉は直訳すると『あなたの魂をへりくだらせる』という言葉です。そして、実際に断食もするわけです。食べ物を断つわけです。「あなたの魂をへりくだらせなさい。」で、そこで何を思うか。これは贖罪の日ですから、その日のテーマは“贖罪”であります。罪の贖いです。ですから断食をして“食材”ではなくて、罪の贖いの“贖罪”を思うように。これが“身を戒める”ことによってなされるわけです。それが断食の目的だということです。魂をへりくだらせて、自分が何者なのか。どこから来たのか。どのように救われてきたのか。この贖罪の日に、罪が赦され、すべての罪がきよめられるこの日に、神の贖罪を思うと。その時に食べ物も断つわけです。断って何をするかというと、その贖罪のことを思う。神のことを思い巡らす。神を最大の関心事とする。自ら食事を断つことによって、神に対して、この贖罪に関して、靈的事柄に関して、焦点を置く。フォーカスを置く。そして祈り、神と交わる。それが断食の目的です。他のことはもう思わない。その断食の間は少なくとも、他のことは考えず、食べ物のことも思わず、ただ主の事のみを思う。断食する時は、まさにそのように主と水入らずの時間をとって、他の肉欲だとか、日常の雑事にとらわれずに、主にフォーカスを置くことが出来る幸いな時となります。今日は金曜の午後でも実はこの断食について少し触れました。モーセは『十戒』をシナイ山の山頂で受けたわけですが、その時 40 日 40 夜モーセは食べることも飲むこともしませんでした。断食したんです。その断食の目的は何だったのか。その時も触れました。神様にほめてもらうためではないという話をしました。そうではなくて、10 の言葉を頂いて、そして神と栄光の中に、これまで味わったことのなかったような親密なその交わり、その臨在。それに圧倒されてもう寝食を忘れてしまったんです。40 日 40 夜、もう食べることもすらどうでも良くなった。もう食べなくてもいいくらい神様との交わりが素晴らしすぎて、もう夢中になって、あまりにも楽しくて。そういうことがこの世にはないわけです。皆さんもいろんなものに関心をもって、いろ

んなものに夢中になると思います。私もその時話しましたけれども、以前は絵描きになりたかったので、絵を描く時、夢中になって二三日平気で寝ることも食べることもしないで、没頭したことがありました。皆さんも一日とか半日とか、もう寝食を忘れて没頭してしまうなんてことがあると思います。あることに夢中になって。でも、そんなものとは比べ物にならないわけです。40日40夜、モーセはもう食べることも、飲むことも、寝ることも、もうどうでもよくなってしまっ。もう神との交わりがあまりにも素晴らしくて。そうしなきゃいけないじゃないんです。断食しなきゃいけないじゃないんです。気が付いたら、食べることを忘れていた。我を忘れていた。忘我の境地、エクスタシーです。これが、真のエクスタシー。このエクスタシーについても今日午後の学びで詳しくお伝えしました。これが断食の目的です。神とのエクスタシーを楽しむためです。私流の言い方をすればそういうことになります。何の邪魔も入らない。神と一対一です。神と膝を付け合わせて、仕事からも解放されて。丁度この贖罪の日は一切の仕事もしません。食べることも、食べるために働くこともしない。ただ神と四六時中、朝から晩まで語り合う。神をほめたたえる。礼拝する。神からの語り掛けを受ける。御言葉に思いを巡らす。ただそれだけの時間です。その中で食べることを忘れてしまった。そのことで断食というものが意味があるものとして、ここで規定されたわけです。習慣とされたわけであり。で、他にも旧約聖書を見て頂くと、多くの聖徒たち、偉大な信仰者たちが断食を習慣としていたということを見ることが出来ます。モーセだけじゃない、ダビデもそうです。また特にエズラ、ネヘミヤ、こういった人たち。彼らが断食する時には、特に神に対して御心を求める時、神から導きを求める時にも断食をしました。で、そのような求め方、そのような目的で断食がなされた例は、新約にもあります。イエス・キリストもそうされました。祈りと断食をもってイエスは重大な決断をなされたり、また『使徒の働き』にも使徒たちがそれに倣って、断食をして神の御心を求め、神の導きを求めて、断食をし祈りをしたという例が記録されています。ですから、神との交わりだけじゃなくて、具体的に今神はこの私に何を望まれているだろうか。その御心を知るのも、やはり神と水入らずになって、神を深く知らなければ、人間関係と同じです。相手が何を考えているのか分からないのではいけないわけですから、そのためには何をしたら良いか。相手と時間を作ることです。相手との時間を共に過ごすということ。そのために、一番効果的なのは断食です。断食しなくても勿論私たちは日々の生活の中で神とある時間枠の中では集中して交わることが出来るかもしれませんが、でも、断食すればまとまった時間集中して、電話も取りません。メールも見ません。スマートフォンも見ません。インターネットも見ません。テレビも見ません。ラジオもつけません。ただ神と一対一です。現代人にはそういう時間が必要とされていると思います。常に電波によって縛られているわけです。どこへ行っても、メールが来るとか、ソーシャルネットワークでフェイスブックだとかツイッターとかミクシーとか、常に私たちが忙しくさせるわけです。何かと繋がられて、いろんな情報によって振り回されてしまう。影響を受けてしまう。でも、断食する時には、ただ神からの影響のみです。他からは何の影響も受けないわけです。ただ、神から影響を受けるだけ。そしてモーセのように気が付いてみたら、顔が輝いていた。そして、これは実際的な話ですけれども、断食しますと血流がお腹ではなくて、脳により多く流れます。食べると血流はお腹に集中します。そうすると必然的に眠くなるわけです。脳に血が行かないからです。でも、断食すると却って脳の働きが冴えてくるわけです。集中出来るわけです。クリアーにいろんなものを考え、判断が出来るようになります。ですから、断食することによって肉体的にもクリアーなマインドで、何をすべきか、神の御心は何か、判定したり判別することが出来るようになります。まあ、よくお腹がすくと集中出来ないからといって食べてしまうかもしれませんが、却って逆効果だということ。却って眠くなってしま。むしろ断食することによって、最初は少し大変です。皆さんもやったことがあると思いますけれども。三日間位はちょっと苦しいです。で、3日過ぎたらもう食欲がなくなります。素晴らしい体験ですからお勧めしたいと思いますが、でも中々そういうまとまった時間をこの忙しい時代におい

て、とるといのは難しいかもしれませんが、お勧めしたいと思います。是非行き詰まったら、長期休暇をとって下さい。三日間。山小屋とかそういう所に行って、主と一対一になって、一日目・二日目は結構つらいですけども、三日目になったらもう食べることももう気にも留まらなくなります。そのようにして、物理的にも肉体的にも断食によってある変化が起きるということも知って頂きたいと思います。そして他にもこの断食にはいろんな目的効果があります。もう一つはあなたが解放されるためです。勿論これは食欲から解放される、日常の雑事やいろんな食欲以外の肉欲といったもの、欲情といったもの、欲望といったものからも解放されます。また普段いろんな人から受けている攻撃や弾圧、迫害若しくは自分自身が抱えてしまってる葛藤している特定の罪からの解放、悪習慣からの解放、いろんなタイプの悩み・問題です。その時に断食をするならば、それはあなたにとって有効なパワフルな武器となります。食欲に対して「ノー」とあなたは、はねのけるわけです。そして主に祈るわけです。これをおかきりにして、その他の肉体的欲求に対しても、肉体的な誘惑に対しても、段階的にあなたは「ノー」と言えるようになります。いわば訓練のようなものです。まずは食欲に対して「ノー」と。そうすると他の欲求に対してもあなたは順次、段階的に「ノー」と言えるようになります。自分を満たすことをやめるということが断食です。腹を満たすことを、私腹を肥やすことをやめる、自分の欲望を満たすことをやめる、自分の願望ばかりを追求すること、夢ばかりを叶えること・追い回すことをやめる、そういう自分を満たすことをやめるということに繋がって、あなたはいろんな執着心から解放されます。いろんな欲情、欲望から解放されます。つまり自分自身を縛っていたものから、自分自身からも解放されるということです。断食はそのために非常に効果的だということです。断食はそのために非常に効果的だということです。断食をしなければ出来ないと断言しているのではありません。断食によってそれが助けとなる。自分の腹に「ノー」と言って、自分の脳に「イエス」と言うんです。是非、断食の効果、目的、これは素晴らしい霊的な習慣となると思います。やったことが無いという人は是非やってみて下さい。いろんなやり方があります。一食を断食する。「私は毎朝断食してます。」なんていうことを言うかもしれません。それは違いますから、勘違いしないで下さい。でも、それも勿論ちゃんと意味をもって、目的をもって成すならば、それも一つでしょう。食事を一食分断食するとか、一日だけとか。又は自分の嗜好品だけ、ケーキを断つとか、又は部分的に減らすとか、いろんなやり方があると思います。ですから是非その辺は主と相談しながら、又自分の生活スタイルもあると思いますから、神様は無理なことは皆さんには命じませんし、押し付けませんので、自分がやりたいと主からそのことを促されたのであれば、是非そうして頂きたいと思いますし、なるべくだったら、ちょっと雑踏から離れてやった方が良くと思います。一人で暮らしている方は楽です。誘惑もありますけれども。でも人と一緒に生活していると中々大変です。他の人も食べますし、他の人の生活のスタイルやパターンもありますから、自分だけというのは中々難しいと思うので、出来たら一人どっか山の奥かに行ければ一番良いんですけども、幸い信州は山に囲まれてますから、テントでも持って行って、山小屋のような施設を借りるのも良いと思います。

で、イザヤ 58:6~7 も参照して頂きたいと思います。『**わたしの好む断食は、これではないか。悪のきずなを解き、くびきのなわめをほどこき、しいたげられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。**⁷ 飢えた者にはあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見て、これに着せ、あなたの肉親の世話をすることではないか。』で、その続きもごさいますが、それは断食の結果得られる祝福のことです。ただここで注目していただきたいのは **6 節**にある“**神様の好む断食**”とはどういうものか。これはやっぱり霊的なものだということが分かります。断食というと、単に食物を断って、それは肉体的なこと、物理的なことと思うかもしれませんが、実は霊的であるということです。真の断食、これは“**悪のきずなを解く**”、“**くびきのなわめをほどこき、しいたげられた者たちを自由の身とし**”今日のテーマであります。あなたの中に苦々しい思いがあるならば、恨み辛みがあるならば、どうしても赦せな

いという思いがあるならば、それを断食をもって断つということです。自分の罪が贖われたことにフォーカスを置いて、焦点を置いて、自分はどういうところから救われてきたのか、自分のために神が何をしてくださったのか、そのことを覚える。聖餐式もそういう時間です。断食はそのための助けとなります。他のものに思いがとらわれないです。奪われないです。妨害されない、そういう空間で、環境で、そういう水入らずの時間の中で、改めてあなたはフォーカスを置くことができます。

で、7節には断食の実践的側面が記されています。断食して当然あなたはパンを、御飯を食べないわけです。で、その浮いた分をとって置くんじゃなくて、それを必要としている人たちに分け与える。飢えた者に、家のない貧しい人たちに、裸の人たちに。これも断食の実践的な側面です。いろんな効果があるということを知って頂きたいと思います。ですから、独りよがりの断食ではないということです。断食して、自己満足して、達成感に浸って、「やったあ。私は3日も断食した。素晴らしい。」じゃないんです。主はあなたの心を探られます。そして、断食によってあなたは主の前にへりくだり、主の前に砕かれ、そして神の望まれる者にあなたは変えられます。自分の肉を断つこと。自分の欲を否定すること。自分を捨てること。自分の十字架を負うということ。それが断食の中にすべてパッケージとして含まれています。それはただ単に欲しいものを我慢することじゃなくて、欲しい人にまた与えるという、それは自分を越えた、自分の枠を超えた、自分をケアするように隣人をケアする。自分を愛するように隣人を愛する。そのようなまた広がりを見せていくということです。自分が赦されたように人を赦す。すべてこれは繋がっているということを知って頂きたいと思います。『山上の説教』の中には沢山のテーマがあるように思いますが、これは一つの説教ですから、バラバラに語られたのではないということです。文脈は必ず押さえないといけません。ですから、他にも断食にはいろんな目的や又効果もありますけれども、ここでのフォーカスは文脈によって得なければいけません。特にここでの文脈は、人を赦すということ。赦し合うということの中で断食が語られているところに注目して頂きたいということです。

で、最後に釘を刺しておきますけれども、断食そのものに、断食自体に何か神秘的な力があるのではないということです。断食さえすれば人を赦せるようになるのか、断食さえすればモーセのようになれるのか、そういうことじゃないんです。コロサイ 2:20~23 を読んで、そのことを確認して頂きたいと思います。『²⁰もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかの²¹ように、²¹「すぎるな。味わるな。さわるな」というような定め²²に縛られるのですか。(これは禁欲主義ということです。)²²そのようなものはすべて、用い²³れば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。²³そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもの²⁴のように見えますが、肉のほしいままな欲望²⁴に対しては、何のききめもないのです。』いくら断食をしようと、いくら滝に打たれようと、目の前に裸の女性が現れたらそれで何の効き目もないということが分かりますね。ですから、そういうふうにして断食そのものに、その人間の苦行努力そのものに、何か神秘的な力があるのではないということです。これはあくまで手段ということです。そこで神様が働かれるということです。善行にしても、施しにしても、祈りにしても、断食にしても、その一つ一つが神秘的なパワーを持っているのではないということです。それは神と繋がるための手段に過ぎないということです。神と効果的に交わるための方法であります。でも、この方法を偽善的に行なえば、ただのパフォーマンスで、勿論そこには何の力もないということです。そして何の報いも効果も経験できないということです。ただの自己満足で終わりです。施しました。良い行いをしました。祈りました。断食しました。それを人に言いふらして、喧伝して、「すごいですね。」と、「立派なクリスチャンなんですね。」と、そのように褒め言葉を頂いて、それで終わりです。それでは無駄でありますから、是非注意しながら、イエス・キリストの警告を受けながらも、私たちは正しい動機で、正しい目的を持って、神様の約束される素晴らしい祝福を自分のもの²⁵としたい²⁵と思います。

で、テキストに戻って頂いて**マタイ 6:19~21**をお読みします。『¹⁹自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。²⁰自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むことはありません。²¹あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。』ここは勿論当時の慣習、風習というものも頭に置いておかなくてははいけません。私たちは今日“宝”と言えばいろんな貴金属とか“お宝”という所謂高価な物をイメージすると思いますが、それを銀行に預けてみたり、倉庫に預けてみたり、いろんな形で保管するわけですが、でもこの当時はそうしたものを地中に埋めたり、またそういったセキュリティーがちゃんとしていない自分の家の片隅であったり、床下であったり、壁の中であったり、いろんなところに隠すわけですから、そこで盗人が入って盗まれてしまうこともあるでしょうし、またそうした中で虫がついたりとか、また錆が出たりとか、折角の“お宝”も価値を失ったり、または盗まれたり、^な失くしてしまうなんてことも多々あったわけです。ですからそんな不確かなものではなくて、貯めてもなくなってしまうものではなくて、是非なくなる宝をイエス・キリストは私たちに得るようにと勧めているわけです。で、ここで重要な言葉は**21節**に見られます。『²¹あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。』これをしっかりと皆さんの心にも刻み付けておいて下さい。具体的な話をすると、この言葉の意味も分かり易くなると思います。今、自分の宝は何であるのかも考えて頂きたいと思いますが、例えば一つ、投資家の人ならば“お宝”と言えば“株”だと思いますが、その“株”なり“土地”でもいいですが、その“株”に投資をします。そうすると、もうその時点からその人の心は“株”に行き、毎日毎日必ず株価の変動をチェックするようになります。株などに興味のない人は、そんなところに心は向かないわけです。でも、株に投資した人にしてみたら、もうそれが最大の関心事。もう暇さえあれば、株価をチェックする。株欄を見る。そのようにして宝を私たちが、自分が時間でもお金でも心でも何でもいいですが、その宝をささげるところ、そこに自分の心は自然について行ってしまうということです。で、この宝をもしあなたが神にささげるならば、又は天に投資するならば、あなたの心は間違いなく神に置かれるということです。若しくは天に置かれるということです。私たちが神様にささげものをする時。献金でも、奉仕でも、また良い行いでも、祈りでもいいですが、それはささげる度に必ず一つの効果をもたらします。自分の中にある自己中心性、自分のことしか考えられないというその自己中心性、所謂自我というもの、また自分の中の食欲さ、自分の中の執着心、神に何かをささげる度にそれらも合わせて私たちは言わばささげていることになります。それを事実上捨て去ることになります。お金をささげる時に自己中心性や、また執着心、食欲、それもいっしょにささげているということです。財布も軽くなるかもしれないかもしれませんが、心も軽くなるということです。精神も楽になるということです。神様は勿論私たちのお金を欲しているわけではありません。必要なか絶対に神にはありません。神はすべてのものを造られ、すべてのものをお持ちです。神様は金欠ではありません。ですから、神様が私たちのお金を欲している、必要としているんじゃないかと、むしろ私たちが神にささげる必要があるということです。それをしなければ私たちはいつまでも自己中心的な人間、いつまでも貪欲な人間、いつまでも執着している人間と、非常にちっちゃい人間、縛られた人間、つまらない人間。いつも「虫が付くんじゃないか。錆が付くんじゃないか。取られちゃうんじゃないか。」怯えている人間に成り下がってしまうということです。主はあなたのお金ではなく、物ではなく、あなたの心を、ハートを欲しておられます。「あなたの心のあるところにあなたの宝がある。」とは言われていません。「あなたの宝のあるところにあなたの心がある。」と言っています。これは重要なことです。天に宝を積み、あなたの心は必然的に天に思いを寄せるようになります。株に投資をすれば、株に心が行くように。天にあなたの宝を積み、天国銀行にあなたが送金すれば、あなたの心は必然的に天に向かいます。天のことを思い巡らすようになります。「この地上にいながら天国気分を味わいたいです。」という人ならば、是非これをやってみて下さい。天に自分の宝を積むということです。

天に送金をするということです。そうするとあなたの心は間違いなく天国に行ってますから、天国気分になります。何故あなたは天国気分じゃないんですか。何故そんなものにいつまでも執着しているんですか。失ってしまうであろう、そんなものに。なくなってしまうであろう、そんなものに。価値の減ってしまうであろう、そんなものに。窮屈ですね。あなたの心はちっぽけで、惨めな最期となってしまおうでしょう。ですから是非イエスの勧め通り、私たちの心が何処にあるのかが、イエスの最大の関心事です。お金がイエスの関心事ではありません。物がイエスの関心事ではありません。イエスはあなたの心に関心があり、心を欲しておられるということです。文脈で考えてみてください。イエスはあなたの良い行いを求めているんじゃないんです。あなたの施しを求めているんじゃないんです。あなたの祈りを求めているんじゃないんです。あなたの断食を求めているんじゃないんです。あなたの心を求めているんです。そこに心があるかどうかです。そして、あなたの心を満たしたいとイエスは願っています。心を天にまで引き上げたいとイエスは願っています。地上にいつまでも執着して、地上のつまらないもの、ちりに過ぎないものに、価値の無いものに心を奪われている、そんな私たちを憐れんで下さって、私たちをもっと自由にして、私たちの心をもっと広げたい、永遠にまで広げたい、それがイエスの願いであります。だから、つまらないことにこだわってはいけません。人を赦さないなんてことも、その類^{たぐい}です。

で、**22 節、23 節**。『**22**からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るい**が**、**23** もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。』目というものは、“からだのあかりとり”であります。そのあかりとりの目が悪ければ、からだ全体も必然的に光が取れずに暗くなってしまおうということです。まあ、これはユダヤ人のヘブル的な表現ですけれども、でも医学的にも昨今は眼底検査というものによって、高血圧や糖尿病、そしていろんな全身疾患を発見する切っ掛けということで、眼底検査というものがよく用いられるようになりました。将来の病気を予測するのにも、目を調べることで分かってくる。興味深いことですけれども、“目はからだのあかりとり”というのは最新の医学においても通用する話であります。で、ここでヘブル的な表現といたしましたので、これは**箴言 28 : 22**を参照して頂きたいと思います。『**22** 貪欲な人は財産を得ようとあせり、欠乏が自分に来るのを知らない。』この“貪欲”というところに*印がついています。欄外を見て頂くと、直訳として「目つきの悪い人」。「目つきの悪い人」は財産を得ようとあせり。財産を得ようと焦っている人の目つきは悪いということです。で、これは直訳は“目が悪い”という言葉でもあるんですけれども、ヘブル的な表現として逆に「目が良い。目つきが良い」というのは、「気前がいい。寛大である。」その反対が「目が悪い。」ですから、“ケチ”ということです。金の亡者、我利我利亡者ということです。それが『貪欲な人』とここでは意識されております。意識されなければ、「目つきの悪い人は財産を得ようとあせり、欠乏が自分に来るのを知らない。」ということで読者にとってピンとこないかもしれないので、敢えてここでは意識して『貪欲な人』と訳しています。「ケチな人」とも言えるでしょう。まあ、ここでの文脈は**マタイの福音書**では“宝”が文脈ですから、この『からだのあかりは目です。』というその“目”のところは、当然“宝”に纏^{まっ}わる話、“お金”に纏^{まっ}わる話。その後の流れも見て頂ければ分かると思います。これは、お金・富に纏^{まっ}わる話だということが分かります。それに加えてこれはヘブル的な表現ということで、箴言などからこの“目”というのは、お金に関わる話。“目が良い”というのは、「気前がいい。寛大である。」“目が悪い”というのは、「強欲で、ケチで、そしてお金に執着する人たち。」そういう人たちのからだ全体、人生は、暗いものとなると言っているわけです。逆に「目つきが良い人。目が良い人。気前が良い人」は、からだ全体が明るくなります。お金に執着していない人、その人は自由です。ケチケチしておりません。^{すがすが}清々しいほどであります。**第1テモテ6章**を今度は開いて頂いて、そこを参照して頂きたいと思います。まずは**9 節**から。『**9** 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。**10** 金銭を愛することが、あらゆる悪の根

だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。』何度もお伝えしている通り、この 10 節の言葉は誤解してはいけません。『金銭』があらゆる悪の根ではないんです。金銭自体が、そのものが、あらゆる悪の根ではないんです。『10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根』であると。富そのものが悪ではないんです。「お金持ちは皆悪い人。」ではないんです。「お金持ちの目つきは皆悪い。」んじゃないんです。お金持ちの寛大な、明るい、爽やかな、清々しい、そういうクリスチャンは、います。でも、ここで注意して頂きたいのは、「金銭を愛すること。」それは目つきの悪い人です。で、結果的にその人の人生は暗いということが分かります。信仰から迷い出て、非常な苦痛を持って自分を刺し通してしまう。私たちの目は何処に向かっているのでしょうか。地上を見ているのでしょうか。それとも天を見上げているのでしょうか。イエスに目を置いて、イエスにフォーカスを置いているのでしょうか。文脈を意識して下さい。イエスにフォーカスを置けば、断食は楽しいものとなります。贖罪の日に、罪の贖罪、これに歓喜して、狂喜して、感動して、感謝して、賛美して、我を忘れて、礼拝に没頭する。目がイエスに向いているからです。目がイエスに向いているならば、お金を愛するということもなくなります。お金に執着するということもなくなります。お金を貯め込んで、「将来はこうしよう、ああしよう。」と地上に夢を描くんじゃなくて、むしろイエスにフォーカスを置くならば、イエスが天に宝を積みなさいとおっしゃってるわけですから、私たちは天に目を向けて、天に宝を積み、天の銀行に送金をして、天に思いを馳せます。上にあるものを求めなさいと、パウロは言いました。ですから私たちもなくなるもののために、決して失うことのないもののために。そして天においては、それは素晴らしく、30 倍、60 倍、ある者は 100 倍、物凄い利子がついてくる、報いが伴うということも、イエスによって教えられていますから、もうワクワクするわけです。たった一杯の水でも、キリストの弟子だからということでイエスの名によって与えるなら、報いにもれることはない聖書(マタイ 10:42)に書いてあります。是非覚えて頂きたいと思います。ただ、イエスの命じられた通りにするならば、報いにもれることは絶対にありません。断食もそうです。ですから、これは天に宝を積む行為でもあるということです。自分の敬虔さを内外に見せつける、そういう機会ではないということです。それは天において見ておられる、隠れたところで見ておられる父が喜ぶことだから、やるのです。すべては繋がっています。すべては同じ文脈です。別々のテーマで話されているわけではないということです。「断食とお金と何の関係があるんですか。」と思うかもしれませんが、お金を断つ、金銭欲を断つ、食欲を断つ。同じことです。何にせよ、それは性欲かもしれませんが、他の名誉欲、権勢欲、自己顕示欲、いろんな欲かもしれませんが。ありとあらゆるタイプの、ありとあらゆる種類の断食、自分の欲望を断つ。これはすべてに共通することであり、そして、同じく第 1 テモテ 6:17, 18 もお読みします。『この世で富んでいる人たちに命じなさい。(この中には一人もいないので、ちょっと私はここで命じることが出来ないですけども。でも、世界のスタンダードで言うならば、ここにいる全員は大富豪です。私はなけなしのお金で生活しているんです。生活保護をもらって生活しているんですとか、無職なんですとか、言うかもしれませんが、世界のスタンダードからしたら、あなたは金持ちです。今この話を敢えて展開するつもりはありませんけれども、でも他人^{ひとごと}事と思ってはいけません。私たちは富んでいるんです。北朝鮮の子供たちからすれば。私たちはこのアジアにおいて富んでいるんです。アフリカにおいて私たちは富んでいるんです。ですから是非このことも覚えたいと思います。) 高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。(金ではなくて、神に望みを置くように。)¹⁸ また、人の益を計り、良い行いに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。』これも『山上の説教』の中でのイエスの教えに通じております。断食して浮いた食料を、貧しい人に分け与えるのも一つです。お金を分け与えるのも一つです。ちょっとしたものを自分が我慢するだけで、今日昼間、“肉”の話もしました。“肉”の問題です。“肉”を断つということ。やめられない、とまらない、カルビ

一かっぱえびせん。それを断って、その一袋百何十円、でもそれを断つ。で、その浮いたお金を、今日食べ物がないという貧しい暮らしをしている人たち、彼らにとってそのお金は一食分になると思います。それ以上であると思います。それでワクチンが買えると。それで生活が楽になるならば、そういうことも私たちは出来るということを知って頂きたいと思います。「余裕がないんです。人のことなんて顧みてられないんです。自分の生活で精一杯です。」と。そんなちっぽけなあなたに必要なのは、断食です。金銭を愛することをやめなくてははいけません。“肉”を断たなくてははいけません。毎日いろんな贅沢品に私たちは囲まれています。いろんな嗜好品、なくてもいいもの、食べなくていいもの、飲まなくていいもの、一杯の缶コーヒーが、一箱のタバコが、一杯の大関が、どうでしょうか。毎日毎日積み重なって、それを貯めていったらいくらになるでしょうか。まあ、そういったことも考えさせられます。天に宝を積みなさい。腹を満たすんじゃなくて、自分を満たすんじゃなくて、神の心を満たすように。神様が喜ばれること、神様が望まれること、神様が命じておられること、それに私たちは思いを寄せる。そうすると私たちの心はもう神に捉えられているわけです。我を忘れて、忘我の境地、没我の境地です。そして本物のエクスタシーに浸ることが出来ます。神と一体となる。それがエクスタシーという真の意味です。自分から離れて立つということは、エクスタシーの原意です。これも午後の学びで教えたばかりです。自分から離れて立つ、神と結びつく、キリストと結びつくことが真のエクスタシー。これを体験したら他はもう翳ってしまう、どうでもよくなるわけです。今まで魅了されていたもの、今までこれが大事だと思っていたもの、自慢だったもの、人にひけらかしていたもの、自分が楽しんでいたもの。そんなものはもうどうでもよくなるんです。ブランド物のあれも、これもです。自分の持ち物すべてです。自分の能力も、資格も含めて、誇りとしたものも、もうどうでもよくなるわけです。で、それを却って今度は自分のためではなくて、他の人のために使うようになる。で、それが天に宝を積む行為となっていく。素晴らしいではないでしょうか。ですから是非それをイエスが勧めておりますので、私たちももっともって行なっていきたいと思います。

で、**24 節**に今度は目を移して下さい。『**24 だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということではできません。**』この“富”という言葉、これは実際には“マモン”という言葉が使われています。“マモン”、*印がついております。アラム語で“マモン”というのは、“お金の神”のことを言います。英語の“マネー”の語源が“マモン”です。古代人はこの“マモンの神”を、お金を信奉していた者は、古代人は、このマモンの神を拝んだわけです。先立つものは金だ、という人たちです。クリスチャンにとって先立つものは“金”ではなくて、“神”です。お金はただの金属に過ぎません。ただの紙切れに過ぎません。でも、このお金を愛するようになると、このお金を頼りにするようになると、このお金を信奉するようになると、このお金がマモンの神になるんです。で、そのお金が偶像となると、偶像には悪霊が働くということを忘れてはなりません。金の亡者、そこには何か霊的な力が働くということです。まるで何かに取り憑かれたように、家族も顧みず、我武者羅に金を稼ぐ。金に身をやつすようにして、何かに取り憑かれたかのように夢中になって金を稼ぎ、金を集め、金を貯める。そして金を使う。異常に感じる時があります。そこには偶像礼拝がささげられていますから、その偶像の背後には必ず悪霊が憑く。偶像礼拝は悪霊に生贄をささげることだと聖書は言っています。ですから、たかが紙と思わないで下さい。たかが福沢諭吉と思わないで下さい。22 円で作れますけれども。一万円でも 22 円で作れますが、でもそこは落とし穴です。その紙切れに過ぎない、価値の無いようなものを拝み始めると、そこには悪霊が働くということです。他の偶像礼拝もすべてそうです。悪霊が働きます。

で、もう一つここでは、『**神にも仕え、また富にも（お金の神にも）仕えるということではできません。**』と。どちらかしかないということです。クリスチャンは皆神に仕えるものです。だからといって、皆貧乏にならなければいけないとか、そういう話ではありません。だからといって、全員が全員、稼いだものを

すべて貧しい人に分け与えなければいけないということではありません。さっきもテモテの手紙で読んだ通り、神様から頂いている富はエンジョイすれば良いんです。ただ、勿論自分の腹を満たすだけじゃなくて、他の人の腹も満たすように。神に喜ばれるために、もっともっと天に宝を積むように、その富を生かしていく。すべてが自分のものじゃなくて、神のものだという認識をもって、十分の一はすべてのクリスチャンであれば、神のものとして献金じゃなくて返金するわけですけども、でもあとの十分の九は自由に使って良いというのが神様の提示であります。でも、それを私たちはいくらでも神にささげること出来まし、それをすべて自分の私腹を肥やすために使うということも出来てしまうわけです。私たちにチヨイスが与えられています。神にも仕え、富にも仕えることは出来ないということです。私たちは神に仕えている中で、この富を神の栄光のために使って頂くようにささげることが出来ます。何のために働くのか。何のために稼ぐのか。神物^{かみもの}を得るためじゃないんです。神に栄光を帰すためです。『**食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。**』(第1コリント 10:31)とパウロは言いましたが、自分の生活のためじゃないんです。働くのは、お金を稼ぐのは、年金をもらうのは、すべて神の栄光のためであります。自分たちの老後のため、生活のためではなくて。そう考えているうちは、あなたは富に仕えていることになります。それがなくては困るとか、それがなくては生活が、それがなくては安定した生活が出来なくなると、不安がっているようであれば、あなたは神には仕えておりません。あなたは富に仕えているということでもあります。信頼しきっていないということです。むしろお金に信頼しているということです。簡単に見分けることが出来ます。神に仕えているのか、富に仕えているのか。お金に関してあなたがどう考えているのか。それですぐに分かります。

で、もう一つここでおもしろい話をしたいと思います。お金というのは在って無いようなものだということを知って頂きたいと思います。どういう事かと言いますと、先程も少し触れたように、一万円札でも22円で印刷できるものです。なのに、それが一万円の価値があるとは一体どういうことなのか。まあ何も考えずに普通に私たちはそれを使っているだけかと思えますけれども、お金の仕組み、お金のからくり、金融システム、それは正にバーチャルな世界と言っても良いと思います。架空の世界、よくマネーゲームと言われますけれども、本当にゲームの世界です。あなたのお金は何処から来たのでしょうか。知っているでしょうか。あなたのお金の価値はどうやって決まるのでしょうか。考えたことがあるでしょうか。また、あなたの貯金を預かっているのは本当は誰なのか、考えたことがあるでしょうか。そういったことを私たちは普段考えないと思うわけです。で、考えないからこそ、盲目的にお金を頼りにしてしまうかもしれません。でも、実際には何の頼りにもならないということ。これらの仕組みやシステムを知ることによって、現実的に理解できると思います。私たちの生活を支配しているのは、お金であると多くの人は考えています。でも、そのお金そのものには何の力も無いということ。紙切れであって、本当にそれは信用ならないものと言って良いと思います。でも、そのお金の仕組みのことを信用創造と言います。信用創造という仕組みです。その仕組みを詳しく話すことは出来ませんが、ちょっと卑近な例で簡単にどんなものか、お伝えしておきたいと思います。

預金者Aさんが100万円を銀行に預金します。次に銀行は100万円の内の一割を支払準備として残して、残りの90万円を会社Aに貸し付けます。会社Aは会社Bに商品仕入れ代金を支払います。会社Bは銀行に90万円を預金します。また次に銀行は90万円の内の一割を支払準備として残して、残り81万円を会社Cに貸し付けます。で、会社Cは会社Dに商品仕入れ代金を支払います。会社Dは銀行へ81万円を預金します。またさらに銀行は81万円のうちの、というようにして、これが無限に繰り返されていくとどうなるのかということですが、最終的には銀行の帳簿には今の例で言うと900万円の貸付と1000万円の預金残高、100万円の支払い準備のための現金が残るという仕組みになっています。全然分かりませんが、という方もいると思いますが、別に知らなくてもいいです。ただ一つだけ知って頂きたいのは、私たちのお

金にはからくりがあるということ。そして私たちのお金はいつでも紙切れ同然になるということ。ただのゲームなんです。ですから、こんなものに頼りを置いてはならないということです。頼りにならないということです。いくら貸し付けても手元に足りなくなることはない架空のお金があって、それで利息を取っている。怪しく聞こえないでしょうか。それが私たちの使っている金融システムです。ですから、悪い言葉で言えば、詐欺師みたいなものです。架空の話をしているわけですから、在って無いような話です。ですから、そういう意味ではこの金融システムは信用創造と言われているわけですから、信仰の世界と言って良いと思います。信用で成り立っていると。思い込みの信用です。ある種の宗教システムと何ら変わらないわけですから、この宗教システムは非常にリスクだということも忘れてはいけません。まあ、このリスクなことは今の私たちにもよく分かります。リーマンショック以来、よく分かってきたと思います。経済という金融システム、これは非常にリスクな宗教だと、そういうイメージを持って頂きたいと思います。そんなものを信じてはいけないと言っているわけですから。「じゃあ、私は金きんを買います。」じゃないです。そういう話じゃなくて、そうしたものに執着してはいけませんし、全幅の信頼を置いてはいけません。これだけあれば将来は安泰だとか、そういう話じゃないということです。そういう話はリスクだということです。

で、いくつかまた名言を皆さんにお分かちしたいと思います。

アメリカの憲法の父と呼ばれるジョン・アダムスという人はこう言っています。「アメリカで起こる紛争、貧苦、混乱のすべては憲法や連邦の欠陥ではなく、美德や名誉を欲することから来るものでもなく、紛れもなくお金、クレジット、流通手形の本質を知らないことが原因なのです。」と。

またロシアの文豪のレフ・トルストイはこう言っています。「お金は奴隷の新しい形です。それは人格を持たないことから特別扱いされてきました。主人と奴隷の間に人間関係など無いのです。」

箴言 23 : 4,5 をお読みします。『⁴富を得ようと苦勞してはならない。自分の悟りによって、これをやめよ。⁵あなたがこれに目を留めると、それはもうないではないか。富は必ず翼をつけて、鷲のように天へ飛んで行く。』皆さんにとっては、“富”というものがどんなものか、イメージ出来たと思います。

箴言 27 : 24 『²⁴富はいつまでも続くものではなく、王冠も代々に続かないからだ。』

これは真理です。三千年前の言葉です。書き換えられていないんです。私たちは同じことを繰り返してきただけです。ソロモンは『箴言』だけでなく、『伝道者の書』も書きましたが、「日の下には新しいものは一つもない。」と。今起こっていることは、もう既にあったことです。ただの歴史の繰り返しです。今に始まったことじゃないんです。ということは、歴史から学ぶことが出来るということでもあります。歴史認識を誤ったら、歴史から学ぶことも出来ません。でも、私たちは聖書の真理があります。法の解釈もいろいろあります。憲法の解釈もいろいろあります。歴史の解釈もいろいろあります。でも、聖書だけは変わらない。だから私たちは聖書をもって真理を見極めるわけです。有り難いことです。人の意見に振り回される必要がないわけです。少なくとも今読んでいる私たちの聖書は、今まで数千年間書き換えられたことが一度もないものです。一番信用できるものです。歴史は書き換えられます。歴史は操作されます。お金も操作されます。誰かが、一部の人が、この世界の金融システムを牛耳っているだけです。日銀、それは公共の金融機関じゃないです。勿論国家の金融機関じゃないことは確かですけども、でも。こういう話をするとまた大変なことになるので止めますけれども。ただ知って頂きたいのは、私たちは全然分かっていないということです。何も知らないでいるということです。でも、聖書は私たちの目を開きます。そして、真理は私たちを自由にします。今まで、「こうじゃないといけない、ああじゃないといけない。」縛られていたかもしれません。皆がやっていることだから、それに合わせて、それに流されて、何も考えずにそういうものだと思っていたから、今はそういう流れだから、今はそういう機運だから、皆がみんなそう言っているから。そういうことにも私たちは流されません。私たちはイエスの言葉に目を留めます。

不動の言葉に、変わらない言葉に、永遠の言葉に目を留めます。

そして、テキストに戻って頂いて 6 章 25～31 までお読みします。『²⁵だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。²⁶ 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。²⁷ あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。(この“いのち”は“身長”と訳せる言葉です。身長を伸ばすのもいのちを伸ばすのも同じことですが、実際に私たちが自由に出来ないことです。)²⁸ なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。²⁹ しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。³⁰ きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。³¹ そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。』一旦ここで止めておきます。『山上の説教』の舞台は、ガリラヤ湖の小高い丘でありました。で、そこには丁度野のゆりが沢山咲き誇っていたと思われまます。空を見れば鳥が飛んでいます。彼らがどうやって養われているのか。時に私たちは、神の造られたものに目を留めなくてはなりません。汗癖して働いて、「自分が働かなきゃ。自分が稼がなきゃ。」自分が、自分がと、我武者羅になってしまうことがあると思います。また不安になってしまうこともあると思いますが、勿論ここで誤解してはいけないことは、「やあ、空を見て、空の鳥を見て、ただ飛んでいるだけだし。野のゆりを見て、ただうわっているだけだし。私も何もしないで養ってもらおう。」それはお門違いであります。実際には何の働きもしない野のゆりでさえも、父に養って頂いているのであれば、働いているあなたが養われないなんてことはまずありえないと、イエスはそのことを言っているわけです。怠慢でよいとか、怠惰でいいとか、ただプラプラ遊んでいればいい、そういう話をしているんじゃないんです。私たちはクリスチャンとして誰よりも勤勉な者でなくてはいけない、模範的な市民でなくてはいけない。それは新約聖書を通して私たちは教えられています。働きたくない者は食べるな、と言っていますから。「でも私は一生懸命職安に通っているんですけども、仕事がないんです。働きたくても働けないんです。」とあなたは言うかもしれませんが、クリスチャンならば職場は常にあるということを知って下さい。クリスチャンであること自体がもう仕事です。あなたの仕事はクリスチャンであるということです。クリスチャンである以上、あなたは働けます。神の働きを担うことが出来ます。それがそのまま給料に結びつかないだけであります。でも、天には宝を積むことが出来ます。

いずれにしても、働く者には必ず報いがある、養いがある、これは神の約束ですから、ですから信じて欲しいと思います。仕事がなくとも仕事をして頂きたいと思います。この世の仕事が無くてでも。神の仕事は一杯あります。今仕事が無いから、この世に無いからこそ、神の仕事が出来るということもあるでしょう。「病気になりました、寝たきりです。」でも、そこにも仕事があるはず。仕事をしている時は、全く祈る時間なんかなかった。でも、病気の今は、朝から晩まで祈れます。凄いいじゃないですか。「教会には行けません。目も悪くなって聖書もあまり読めなくなりました。(目つきが悪いという意味じゃなくて)、視力が落ちてしまって、中々細かい字を読むことが出来ません。すぐ疲れてしまいます。」でも祈ることは出来るはず。子どもでも年寄りでも祈ることは出来ます。仕事は一杯あります。水を一杯誰かに汲んであげるといこと。困っている人に手を差し伸べるといこと。お金が無くてでも出来ることです。お金が無いから断食もし易いかもしれません。お金があつたら中々断食をしようと思わないかもし

れませんが。でも、是非神様があなたのすべての必要を満たして下さる。だから心配無用だということを感じて欲しいと思います。心配してはならないと何度も言われています。心配しても始まらないと、よく言いますが、^{むしやのこうじさねあつ}武者小路実篤の言葉です。「尊敬すべき幸福な人は、逆境にいてもつまらぬことはくよくよせず、心配しても始まらないことは心配せず、自分の力の無いことは天に任せて自分の心掛けを良くし、根本から再生の努力をする人である。」その人が尊敬すべき幸福な人だと^{むしやのこうじさねあつ}武者小路実篤は言っています。その通りだと思います。聖書にも同じことが書いてあります。Iペテロ5:7これは有名な箇所です『あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。』心配するのはあなたのやるべきことじゃありません。これは神の仕事です。私たちは仕事がなくとも、心配するという仕事を率先して、夢中になって、躍起になってするかもしれませんが、それは神の仕事です。神の仕事を奪ってはなりません。神があなたのことを心配して下さるんです。神に心配させてあげて欲しいと、変な言い方ですけども。神様は私たちに「わたしに心配させてもらいたい。」とおっしゃってるわけです。同じような言葉がピリピ4:6にもあります。『⁶何も思い煩わないで（これは命令形です。思い煩ってはならない。）、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。』で、7節『⁷そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が（人の平安ではなくて、神の平安が）、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。』そのためには何も思い煩ってはなりません。心配してはなりません。これは命令です。心配すれば、あなたは神の仕事を奪って、命令違反をすることになります。空の鳥を見て下さい。心配していますか。野のゆりを見て下さい。ちなみに、ゆりというのはおそらくはアネモネとかチューリップなどの球根、原種のチューリップ、イスラエル産であります。丁度今壁に貼ってあるイスラエルのカレンダーの先月の分を皆さん覚えているでしょうか。そこに野のゆりが咲いています。後でめくって見てみて下さい。綺麗です。お花畑のように咲き誇ります。何も心配していません。神がすべて養って下さるわけです。神が美しく装ってくれるわけです。でも、私たちはアネモネよりも、チューリップよりも、遥かに優れているものです。

で、もう一つここで引用したいものがあります。それはブログにも以前引用したもので、『思い煩いからの解放』というタイトルの本のもので、J.E.ハガイという人が書いたものです。彼は24歳の時にこの本を書きました。「思い煩いは生まれつきかかっている不治の病気でもなく、先祖の受け継いだ不幸な弱さでもありません。あなたは自分ではどうしようもない大敵の惨めな犠牲になっていると、言い訳をしてはならないのです。思い煩いは二つの理由によって罪なのです。第一は神の真実を信用しないことでしょう。第二にそれは神の宮を傷つけることになります。（まず第一に神の真実を信用しない。だから思い煩いは罪だと。第二に神の宮（自分の体のことです。）を傷つけること。だから思い煩いは罪であると。ここでは第一の理由だけをお伝えしておきたいと思いますが、）思い煩いは神の真実を信用しないことであります。あなたが思い煩う時、神は嘘つきだと告訴していることになりますと。『神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。』（ローマ8:28）と言います。ところが思い煩いは「神様、あなたは嘘つきです。」と言います。神の御言葉は「この方のなさったことは皆素晴らしい。」（マルコ7:37）と言います。思い煩いは、「神様、あなたは嘘つきです。」と言います。神の御言葉は『私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。（ピリピ4:13）』と宣言します。思い煩いは「神様、そんなはずはありません。」と言います。神の御言葉は『私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます。』（ピリピ4:19）と主張します。思い煩いは「神様、それは嘘です。」と横槍を入れます。神の御言葉は『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。』（ヘブル13:5）と言います。思い煩いは「神様、あなたは嘘つきです。」とやり返します。神の御言葉は『神があなたがたのことを心配してくださる』（Iペテロ5:7）と説きます。思い煩いは「それは嘘です。」

と反発します。神の御言葉は『そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。』(マタイ 6:31,32) と教えます。思い煩いは「神様、あなたは嘘つきです。」と言います。思い煩いは完全な偽善です。なぜならそれは神を信じると口では言いながら、同時に神の真実を攻撃しているからです。」一つ一つの言葉を皆さんの心に留めて頂きたいと思います。神の御言葉の約束に対して、あなたは「アーメン。」と言っているのでしょうか。もし、心配しているならば、口では「アーメン。」と言っても、心では神に対して「あなたは嘘つきです。」と言っているわけです。神に対して「あなたは嘘つきだ。」と言ってるんです。心配しているその時点で、どうしようと思っているその時点で、金が無いと思っている時点で、老後どうしようと思っている時点で、「神様、あなたは嘘つきです。」と言ってるんです。明日からの生活どうしよう、来月の支払いどうしよう、そう言っている時点で、あなたは神に対して「あなたは嘘つきだ。」と宣言してるんです。これは大きな罪です。「いや、私は心配性なんです。ちょっと思い煩っただけなんです。ちょっと口から吐いて出ただけなんです。」と。言い訳無用です。あなたが神を本当に信じているならば、神の平安があなたを満たすはずです。あなたの口からは一切の思い煩い、不平不満、恐れ、出ないはずです。

で、**32 節**に戻って下さい。『³² こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。(言い換えれば、不信者が、神を知らない人たちが、偶像礼拝者が、切に求めているものです。何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、所謂生活必需品、衣食住です。)しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。』神はすべて知っています。あなたにとって何が必要なのか。その神があなたに与えないとしたら、それはあなたにとって必要でないということをおきまえて下さい。

「少なくとも今はいない。」ということです。将来は与えられるかもしれませんが。あなたにとってそれは有害となる可能性もあると知っていますから、敢えて与えないということもなさるわけです。それによってあなたは誘惑に陥ったり、それによってあなたは神から離れたり、それによってあなたが偶像礼拝に陥るかもしれない。神はすべてそのことをご存じですから、そのすべてをご存じの方があなたにとって最善のことをなしておられる。そのことを信じて下さい。この神を信頼して下さい。あなたは鳥よりも優れているじゃないですか。ケンタッキーフライドチキンを食べるじゃないですか。野のゆり、庭に咲かせているじゃないですか。どちらの方が優れているんですか。

で、**33 節**に『³³ だから (実はこの“だから”という言葉はギリシャ語では、逆説の接続詞の“de”が使われています。“de”というのは“しかし”と訳されます。ですから、ここは“しかし”と訳したほうが良いと思います。しかし)、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。』もう皆さんも暗唱している聖句だと思います。“だから”じゃなくて、“しかし”です。今までの内容を思い出して頂ければ、文脈に沿っていると思います。私たちはかつては異邦人と同じように、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、もうそんなことばかりです。自分の、自分の、自分のばかりです。でも、クリスチャンは違います。神を信じ切っている人は違います。たとえ食べるものがなくても、たとえ飲むものがなくても、たとえ着るものがなくても、しかし、私たちはまず第一にそんなものよりもまず真っ先に神の国とその義を第一に求めるということです。これがキリストの弟子です。これをイエスは自分の弟子に向かって語っています。神の国です。御国のことです。主の祈りでも『御国が来るように。』とイエスは祈ることを教えました。クリスチャンがまず第一に求めるのは自分の国じゃないです。イスラエルという国じゃないんです。日本という国じゃないんです。アメリカという国、韓国という国じゃないんです。クリスチャンがまず求めるべきは、神の国です。神の国は、この世の国とは全く異なる国です。私たちはこの世の国のことを、自分の国のことを思って、憂いで見たり、躍起になって「ああでもない。こうでもない。」と議論したり、今もいろんな議論がなされておりますけれども、でもクリス

チャンはまず何処に自分の国籍があるのか覚えて、天にその国籍はあるということ。ですから私たちはこの世の国のことで思い煩ってはならないということです。勿論憂いで指導者のためにとりなす、祈るとか、その国が癒されるために、その国が神に立ち返るように。まあそういうことを憂いで祈ってもいいわけです。心配するという意味じゃなくて。リバイバルを願って良いわけです。でも、それよりも何よりも先に私たちが求めるべきは、神の国です。神の支配、というのがその原語です。“国”は“バシユレイヤ”です。で、“神の義”、これは神との正しい関係を表しています。これをまず第一に求めなさい。求めの順番があるということです。“まず第一”という言葉がそれを物語っています。何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、そういうことを求めてはいけないと言ってるわけじゃないんです。この世の国について考えてはいけないと言ってるんじゃないんです。優先順位のことを言っているんです。何を先に求めるのか。有名な聖書講解者のマシュー・ヘンリーはここにこういうコメントをしています。「**魂と来世の心配を、他の事柄への心配より先にすべきではない。**」“魂と来世の”後に来る世の心配を、他の事柄への心配より先にすべきではないと。“心配”という言葉を使っておりますけれども、要するにケアということです。私たちはこの世の国のことばかりにとらわれてしまうのではなくて、むしろ来世、あの世の来るべき国のことをもっと求めるべきです。私たちの宝は何処にあるのか。心は何処にあるのか。私たちの行き先は何処なのか。この日本は神の国じゃないんです。アメリカも神の国じゃないんです。韓国も神の国じゃないんです。文鮮明はそう言いましたけれども、そうじゃないんです。モルモン教はユタ州が神の国といっていますが、そうじゃないんです。国家神道は、日本は神の国と言いますが、そうじゃないんです。この地上は神の国じゃないんです。でも、神の支配がもう始まっているんです。イエス・キリストがこの世に来られて以来。まずは目には見えない形で、イエスを信じる私たちの中にこの神の国はもう始まっているんです。ルカの福音書には、「神の国はあなたがたのただ中にある。」と。でも、それで終わるんじゃないんです。イエス・キリストは、文字通り目に見える形でも神の国を樹立されます。それはまずは千年王国というメシヤ王国によってです。エルサレムにイエスは王の王、主の主として君臨されます。そこにはもう国境がないということを知って下さい。日本だとか、アメリカだとか、韓国だとか、中国だとか、そんなものはもうないということです。で、それはおとぎ話じゃないんです。その国はもうすぐに来るかもしれません。今日携挙があったら、7年後にそのメシヤ王国はこの地球に樹立されているということを思ってください。なのに私たちは自分の国がどうのとか、よその国がどうのとか、そのことについて関心を持って、注意を払って、そして私たちは祈っていくことは必要かもしれませんが、でも、そこに心を置いていたならば虚しいということを知って下さい。もっと大きな目を、もっと大きな心を、もっと大きなビジョンを、もっと大きな信仰を持たなくてははいけません。小さいものばかりに目を留めているので、イエス・キリスト以外のものにばかり目を留めているので、私たちはいつまでも苦しんでいるんです、振り回されているんです、悩んでるんです、思い煩っているんです。だから、赦せないとか言うんです。だから、あれがない、これがないとか言うんです。イエスは「神の国とその義をまず第一に求めなさい。」そうすれば神の国と、神の義も頂けるんです。これは凄いことです。求めたら与えられちゃうんです。私たちが求めて、どうしてこんなものが与えられるのか、不思議でなりません。そんな資格はないはずで。神の国と神の支配と神の正しい関係が求める者に与えられる。で、それだけじゃなくて、副産物としてこれらのもの、衣食住も、生活に必要なものも神はちゃんと備えて下さる。『**だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。**』明日が主の日かもしれません。あなたを迎えに来られるかもしれません。地上から引き上げられて、携挙されて、イエスと顔と顔を合わせて、そして一瞬にして私たちのからだはキリストと同じ姿に、栄光のからだに変えられるかもしれないんです。そのことを思った時に、「明日どうしよう。支払いどうしよう。仕事のノルマが。人間関係がどうの。何を食べるか、何を飲むか、何を着るか。」そんなことで悩むことはなくなると思います。『**神の国と神の義をまず第一に**

求めなさい。』厳密には、『求め続けなさい。』です。後のことは神様が面倒を見て下さる。世話をして下さい。神があなたのことを誰よりも心配しておられます。そして、イエス・キリストの教えを見ても分かるように、神の関心事は私たちの心であります。肉体はどうせ滅びるわけですから。肉体をよく見せようとも、肉体において最高の健康を得ようとしたところで、いつかは老いて死ぬだけです。病気にもなります。でも、私たちの魂、私たちの霊、それは永続するわけです。神の関心事は永遠に続くものです。永遠になくならないもの。そこに神は重きをおいて、そこをケアしたい。そこを心配してるんです。あなたの永遠の行き先を心配してるんです。あなたの魂の行方を心配してるんです。神様が心配して下さいということは幸いです。あなたは一切心配しなくていいんです。ただ救われていることをエンジョイすればそれでいいんです。「神様、感謝します。私に神の国を与えて下さって。私に正しいあなたとの関係を与えて下さって感謝します。もう何も思い煩うことはありません。あなたに支配されるならば、何を心配する必要があるでしょうか。他の人間関係がどうしても、口も利いてもらえなくても、憎まれようと、辱められようと、馬鹿にされようと、除け者にされようと、あなたと正しい関係を結んでいるならば、私はそれで十分です。一人ぼっちじゃないです。あなたが私の父です。イエス・キリストが私の花婿です。だから私はさびしくありません。何も心配しません。何も恐れませんが。私は満たされています。だから、この世のものに、塵にすぎないようなものに、執着しません。だから、人を赦せないとか、赦さないとか、そんなものにもこだわりません。固着しません。もうすべて私は得ています。素晴らしいものを頂いております。この世にないものを頂いております。あなたとの関係、それは正に最高の忘我の境地です。これ以上のエクスタシーは他にはありません。これを知ってしまった以上、これを味わってしまった以上、私はもう他に何も要りません。だから、心配も要りません。」ということです。今日はこれで終わりたいと思いますけれども、是非これは『**山上の説教**』の全体で話をしておりますので、この文脈をいつも忘れないで下さい。**5章**から始まっています。全部繋がっています。『**主の祈り**』がすべての項目をカバーしていますけれども。最初の『**八福の教え**』もすべて説教の中に必ず織り込まれております。一つ一つが切り離されてバラバラに語られているのではないということを、全部繋がりがあるということを、イエス・キリストが何を言われているのか。「悔い改めなさい。天の御国は近づいた。」と。そこから『**山上の説教**』は始まっています。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」イエスは今晚来られるかもしれません。イエスに会う準備は出来ているのでしょうか。あなたは神の国をまず第一に求めていたのでしょうか。神との正しい関係をまず第一に求めていたのでしょうか。そうでなかったならば、悔い改めなくてははいけません。心配していたならば、思い煩っていたならば、あなたは神を嘘つき呼ばわりしている大罪人です。即刻悔い改めて下さい。心配することが罪じゃないと思っている人が多いと思います。心配は重罪です。神の仕事を奪っているからです。では、今日はこれで終わりたいと思います。